

## 在宅医療連携拠点事業成果報告

拠点事業者名：医療法人社団爽秋会

## 1 地域の在宅医療・介護が抱える課題と拠点の取り組み方針について

地域における医療・介護の情報共有が大きな課題であり、電話、文書のやり取りだけでなく、実際に同一の場で同じ問題に対して話し合える環境の整備や、情報共有システムの構築が必須であった。そのため、情報共有を含めた勉強会の企画及び実施、情報共有システムの構築とそのシステムのクラウド化を行う方針を立てた。

## 2 拠点事業の立ち上げについて

主たるメンバーの職種として、医師・看護師・ケアマネージャー・ソーシャルワーカー・事務を専任し、医療関係については医師・看護師、地域連携については主にケアマネージャー・ソーシャルワーカーを中心に業務分担を行い、それぞれについて事務の配置を行った。

特に苦労した点は、メンバー間での情報共有の時間の確保である。

それぞれのメンバーがケアの現場で不可欠な戦力であり、患者とその家族へのきめ細やかなケアを行っており、しかも、地域内に生じた多様なニーズに機動的に対応するために設置した複数の拠点に所属し日々の業務に従事している。そのため、一堂に会することの困難さ、時間の確保の難しさがあった。

特に少人数で患者ケアにあたっている常勤介護職については、時間の確保が難しく、メンバーの選定が不可能であった。

このため、主なメンバー間での情報共有にはメールや院内の電子掲示板などを活用した。

## 3 拠点事業での取り組みについて

## (1) 地域の医療・福祉資源の把握及び活用

主に集計作業については、事務職で対応。インターネット情報や東北厚生局の指定医療機関情報

などを活用。

## (2) 会議の開催(地域ケア会議等への医療関係者の参加の仲介を含む。)

7月、10月、11月、1月に計5回の勉強会と、2月に情報交換会を開催。

## (3) 研修の実施

7月、10月、11月、1月に計5回の勉強会を主催し、緩和ケアに携わるすべての職種に関わるスピリチュアリティ・臨床倫理について勉強会を行った。

こうした勉強会は、多職種が現場の中で日々感じていることを交換できる場となりうる。これを継続して実施することが、連携者が相互に顔の見える関係と、緩和ケアの勉強の場の構築になるものと思われる。

## (4) 24時間365日の在宅医療・介護提供体制の構築

複数名の常勤医師を配置し、夜間当番、祝日当番を持ち回りとし、個々の医師の業務負担を軽減しつつ、患者の緊急時の変化に対応。

看護部は全担当患者の状況を把握できる規模として5名程度を1チームとして4チームを編成。

チーム単位で緊急連絡先を設定し、看護師がファーストコールを受けて、医師などと連携して対応。

患者からの緊急連絡がつかないことを避けるため、看護師が通話中もしくは一定のコール数をかけてもつかない場合は、作業療法士・介護職・事務で編成したセカンドコール先を設置。

情報共有に関してはクラウド化した電子カルテを導入して、24時間365日最新の情報を入手できる状況を確保。

この体制で365日24時間体制を構築

## (5) 地域包括支援センター・ケアマネージャーを対象にした支援の実施

ケアマネージャー情報交換会を実施し、地域包

括支援センターのケアマネージャーや地域のケアマネージャーが抱えている問題を抽出。

医師とケアマネージャーが別組織の場合、日々の医師の状況がわからず、相談も気軽にできない等意見があった。

ケアマネージャー同士の情報交換や医療者との意見交換により、今後の連携方法などの改善策など整理できた。

今後も継続して情報交換会を実施していく予定。

- (6) 効率的な情報共有のための取組(地域連携パスの作成の取組、地域の在宅医療・介護関係者の連絡様式・方法の統一など)

クラウド化された電子カルテを導入。インターネットが接続された場合には、場所を選ばずにどこからでも情報の取得が可能となるようにした。医療情報・介護情報については患者IDを統一し、全職種で情報を共有できるようになった。

外部との連携患者情報については、連携患者のみに限定した情報を共有することが可能となる。今後は順次、患者との同意書を得たうえで情報共有を開始していく。

- (7) 地域住民への普及・啓発

2012年11月25日に主に仙台市太白区の地域住民を対象とし、在宅緩和ケアをテーマに在宅緩和ケアを提供している医師、看護師、ソーシャルワーカーをシンポジストとしてシンポジウムを開催。地域の広報誌を活用し、約130名から参加希望があった。

アンケート結果では概ね好評であったが、「在宅医療のイメージがわからない。」、「レスパイトケアの必要性」、「どこであれば標準化された医療を受けられるのか。またその情報はどこで受け取れるのか。」といった点での意見や質問が多く寄せられた。

患者や家族のニーズとして上記のような意見や要望が確認された。これは社会にも広範に存在するニーズであると考えられる。そのため、今後はこれらの論点をとりあげてシンポジウムや勉強会を開催していく予定。

- (8) 災害発生時の対応策

外部データセンター(クラウド)の設置

2011年3月11日の東日本大震災では、データベースのアクセスが不可能となり、業務遂行に大きな障害となった。中心市街地より離れている診療所のため、市街地中心部において電源の回復がなされていても、診療所所在地でのその回復には遅れが生じた。そのため発災後も一週間ほどはスタッフの記憶等に依拠した患者管理を強いられる状況となり、ケアを行う上での大きな障害となった。

電子カルテをクラウド化し、院内にバックアップを置くことにより、情報共有が全くできなくなる状態を改善することができた。

- 4 特に独創的だと思う取り組み

当院では、組織内に現場職の医師・看護師・ケアマネージャー・ソーシャルワーカー、作業療法士、介護職員、鍼灸師がいる。そのため職種間でのリアルタイムの情報共有の実現が大きな課題となっていた。

これまではデータベースの保管場所が院内サーバであったため、VPN接続などの制限があり、同時接続数も限られたため、全職種がリアルタイムで情報入力することも取得することも不可能であった。クラウド化したことと、電子カルテを使うために必要なものがブラウザのみであるため、タブレット端末等でも運用可能となり、全職種に対して安価な端末の配布で、情報共有が可能となった。

さらに、米国の専門教育と実践を経験したチャプレンの講師により、スピリチュアリティの面において専門的な意見を得られたことで、各職種が緩和ケアにおいて重要なスピリチュアリティの認識が高まった。

- 5 地域の在宅医療・介護連携に最も効果があった取り組み

職種間でのリアルタイムの情報共有の実現が大きな課題となっていたので、クラウド化した電子カルテがタブレット端末等でも運用可能となったことで、連携するための情報共有が容易になったことは非常に効果大きい。

地域の連携先薬局や訪問看護ステーションなどに対して、情報共有方法としての協力依頼中。

- 6 苦労した点、うまくいかなかった点

事業の主要メンバーである医師・看護師・ケアマネ

ージャー・ソーシャルワーカーが365日24時間対応を実施し、しかも地理的に離れた複数の拠点でケアに従事しているため、一堂に会する機会の確保や情報共有が非常に困難をきたすことが多々あった。その困難に対応するべく、メールや掲示板を活用したものの、膨大な量の情報の整理に多くの時間が費やされた。しかも、情報の円滑な伝達に支障が生じることもしばしばあった。メール等での文字情報だけでの連絡が多かったことに起因しての、情報の解釈・認識のずれなどもしばしば生じた。

#### 7 これから在宅医療・介護連携に取り組む拠点に対するアドバイス

当院では、医療職・介護職がともに同一組織内に所属し、比較的顔面を合わせる関係づくりが円滑に進んでいるものと思われる。そうした関係の上で、365日24時間体制をもって、職員一人一人が患者と家族のニーズに即したケアにあたることが重要である。しかし、患者数の急増によって一定の患者数の超過が生じた場合、連日のように夜間や休日等の時間外対応が多発、常態化する。このような場合、通常通りのカンファレンスの実施や、時間内でのカンファレンスへの参加自体にも非常に困難をきたす。

日々、カルテ等で情報共有の実施は可能である。しかし実際には、文字情報だけでは伝えきれない表現や微細な状況等の確認もあり、実際には直接の会合をもつての話合いが非常に重要である。

とりわけ、介護系のスタッフが医療職に対して遠慮することがある。それゆえに、忌憚のない意見を交わせる関係づくりには医療職からの歩み寄りが必要と思われる。

#### 8 最後に

365日24時間対応を行うことは容易ではない。しかも、多職種が真の連携を行うことは更に難しい。今回の在宅医療連携拠点事業を通して、現場職に大きな負担を課したものの、多職種の連携について考える機会、および事業を通してしっかりと情報を整理する機会を得られたことの意義は非常に大きかったと思われる。

同様の事業が今後も行われるのであれば、在宅療養支援診療所として実績を積み重ねてきた機関に

関しては、同一機関による事業の継続だけでなく、むしろ、こうした事業を未だ経験していない機関が、事業経験のある地域の機関から情報を得られる機会をより多く用意しても良いように考えられた。そこでコミュニケーションや事業の改善案により、地域の多くの機関がこの事業の重要性を認識していくことで、地域の在宅緩和ケアの普及に成果をあげるものと思われる。